

「見晴台学園大学」における卒業論文活動の取り組み

——大学における発達障害や知的障害のある青年の学習を実質化するための
修学支援の在り方を視野に入れて——

寺谷直輝*

1. はじめに——問題の所在

2014年に日本政府が批准した「障害者の権利に関する条約」の第24条（教育）で、「締約国は、障害者が、差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができることを確保する。このため、締約国は、合理的配慮が障害者に提供されることを確保する」（第5項、下線は筆者）と述べられており、障害のある学生に対する大学に入学する前から大学を卒業するまでの修学支援の在り方が、高等教育の享受を実現するための課題の1つとなっている。

知的障害のある生徒の大学進学に関する現状は、2021（令和3）年度の『学校基本調査』によれば、2021年3月末の特別支援学校高等部を卒業した知的障害者18,992名のうち、大学（学部）と短期大学（本科）への進学者が計4名（0.02%）であることから、特別支援学校高等部に在籍している知的障害のある生徒は、卒業後における大学進学率が1%を満たない。大学進学率が低い原因について、想定されるのは、大学受験への不合格に原因があるのではないかという考え方であろう。つまり、生徒は大学への進学を希望しているが、大学受験に合格できないために、結果として、大学進学者数が少なくなっているという考え方である。しかしながら、2021（令和3）年度の『学校基本調査』によれば、2021年3月末の特別支援学校高等部卒業者のうち大学への入学志望者数は、大学10名・短期大学1名の計11名（0.08%）である。したがって、大学受験に合格できなかった結果から大学進学率が低くなっているのではなく、そもそも大学に受験する生徒数が少ないのが、大学進学率が低い理由で

ある。知的障害のある青年へのインタビュー調査で、「進学が選択肢にないので早く就職したい」「学校の考えで就職先を決めるのではなく生徒の意見をもっと尊重して欲しかった」「もう少しゆっくり社会に出たかった」「高校認定のことがよくわからないし、大学はお金がかかりそうだし、働くしかなかったため進学を諦めた」等が回答されていることから（高橋・池田・田部 2020：36）、特別支援学校高等部に在籍している時点で、大学への進学が進路の選択肢として視野に入っていないと考えるのが妥当であろう。さらに、愛知県内で勤務する中学校教員へのインタビューでは、「現在の学校は私の病気にも理解があって、とても楽しく過ごすことができる。同僚は能力主義的な考えがあるようで、子どもたちが特別支援教育高等部へ行くために、職業訓練をしに学校へ来ているように考えている」（あいち県民教育研究所 2020：71）と述べられていることから、中学校段階で高等部卒業後を視野に入れた職業訓練が行われている実態もある。

一方で、2019年に全国障害学生支援センターが行った調査（調査対象の大学802校のうち回答があった393校の結果）によれば、知的障害のある学生が在籍している大学は20校である（表1）。このデータからすると、実態としては、『学校基本調査』の結果よりも、多くの大学で知的障害のある青年を受け入れているのではないかと（知的障害のある青年が大学の正規課程で学んでいる）という仮説が成り立つ。障害特性として、知的障害のある人は、言語発達（言語理解・言語表出能力）や学習技能（読字・書字・計算・推論など）といった概念的スキルの困難性、対人スキルや社会的行動といった社会的スキルの困難性、日常生活習

表1 知的障害のある学生が在籍していると回答した大学

都道府県	大学名・区分	都道府県	大学名・区分
宮城県	仙台大学・私立	愛知県	豊橋創造大学・私立
埼玉県	城西大学・私立	大阪府	大阪音楽大学・私立
千葉県	放送大学・私立	大阪府	大阪産業大学・私立
東京都	東京家政学院大学・私立	大阪府	大阪電気通信大学・私立
東京都	東洋学園大学・私立	大阪府	四天王寺大学・私立
東京都	立正大学・私立	大阪府	帝塚山学院大学・私立
東京都	和光大学・私立	兵庫県	神戸松蔭女子学院大学・私立
神奈川県	横浜美術大学・私立	広島県	広島女学院大学・私立
福井県	福井工業大学・私立	愛媛県	松山東雲女子大学・私立
愛知県	同朋大学・私立	福岡県	福岡女学院大学・私立

全国障害学生支援センター (2020) より筆者作成

慣行動・ライフスキル・運動機能といった実用的スキルの困難性が指摘されている (文部科学省 2020: 24-25)。そのため、学力不振や学生生活不適応・就学意欲低下により中途退学する可能性は十分に想定される¹⁾。知的障害のある青年も学ぶことのできるインクルーシブな大学づくりを実質化するためには、概念的スキルの困難性を有する知的障害の青年に対する授業 (講義・演習・実習といった教育場面) における修学支援の在り方、もっと言えば、教育方法学や教育心理学で議論されるテーマである学習指導の形態、教授-学習理論、動機づけの理論が、知的障害のある青年に対する教育場面でいかに応用できるのかという課題が浮かび上がってくる。

以上の問題意識から、本実践記録は、2020年度に、「見晴台学園大学」²⁾で行った、知的障害のある青年2名 (池谷さんと宮澤さん) の卒業論文活動の取り組みとそこでの筆者との関わりの過程を紹介し、この間に示唆を与えることを目的とする。

見晴台学園大学を選んだ根拠について、見晴台学園大学は学校教育法第1条の認可を受けていないものの、知的障害等のある人々に大学に準ずる教育を保障しつつ、大学教育の可能性と必要性を実践=実証していくことを目的に2013年10月に開校されたこと、つまり、一般の大学を想定して知的障害のある青年に教育機会を保障しているのが理由である。古山 (2019: 33) によれば、「見晴台学園大学は、教育機会を学生たちに保障する「教育施設」としての役割だけでなく、高等教育における障害のある青年たちへの教育および学習支援のあり方を実践的に研究していく「研究機関」としての役割を果たすことを通じて、社会貢献に寄与することが見晴台学園大学の大きなミッション

として位置づけられている」と説明されている。また、寺谷 (2021a) は、見晴台学園大学の実践は見晴台学園大学の中だけで完結するのではなく、特別支援学校高等部や一般の大学も視野に入れて検討していることを主張している (図1)。

先行研究では、一般の大学における知的障害等のある学生に対する修学支援の在り方は、事例報告に留まっており (例えば、向井 2007)、また、前述した「見晴台学園大学」の関係者が、知的障害等のある青年に対する卒業論文活動に携わった経験から、卒業論文の方向性や在り方について主張しているにすぎない (例えば、大竹 2016、田中 2017、寺谷 2021b)。

まず、見晴台学園大学のサブ・ティーチャーとして学生の学習面・生活面をサポートしている大竹 (2016: 179) は、「ただ、好きとか、自分の趣味について書くだけでなく、そこに客観的な視点を当て深めていくこと、大学では研究という課題に挑戦する」ことを大学での卒業論文の条件に位置づけた。次に、見晴台学園大学の学長であり卒業論文指導を担当している田中 (2017: 95) は、「見晴台学園大学に入学してくる学生は、読み書き能力など、さらに、多様化してくることが考えられる。その中で、卒論のあり方も多様化していくことは必然である。これまでの文章を中心とした卒業論文だけでなく、写真や絵画、マンガ、製作など様々な表現手段を用いた「卒論」が求められる」と述べており、本人たちの読み書き能力等に応じて、主に芸術大学で行われている「卒業研究」や「卒業制作」といった文章に代わる表現の可能性を見出している。そして、客員共同研究員という立場から見晴台学園大学での研究や実践に関与している寺谷 (2021b: 67-68) は、2020年度に行った場面緘黙のある研究生の論文

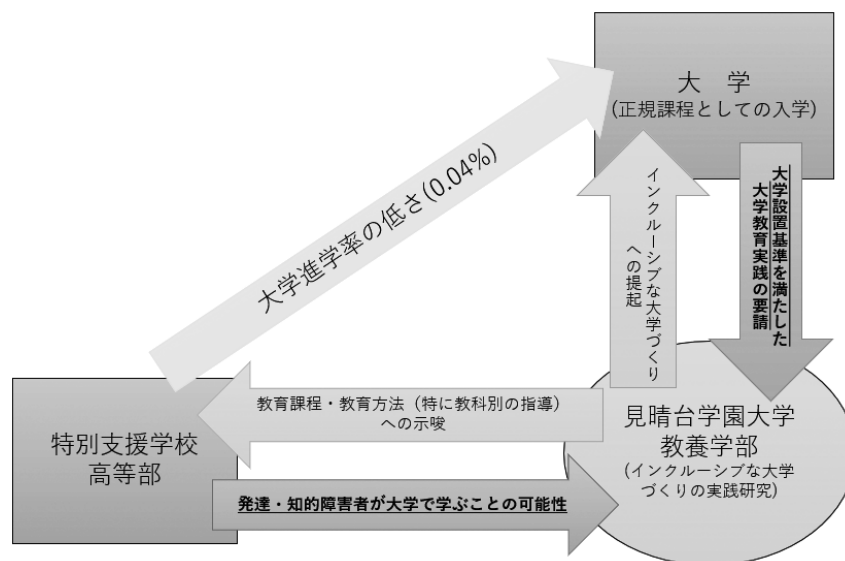


図1 見晴台学園大学・特別支援学校高等部・大学の関係性 (寺谷 2021a を一部改変)

指導補助の経験から、「論文に向き合う研究者は『(学問的・実践的) 意義』を大事にする。意義があることは大事であるが、同時に、書いている本人にとっては『意味』も大事である。研究者以外にとっては、むしろ、学問的な意義だけでなく、論文を書くことで学問に近づく意味が重要である場合もある」と述べている一方で、「学生の実態に合わせた卒業論文の臨界もあると感じている。本人たちに意味があるからといって、論文の形式やルールを遵守しなくても『論文』と呼んでよいのだろうか」と疑問を提起している。これらの先行研究では、支援者が考える卒業論文の位置づけや在り方に集中しており、学習者(知的障害のある青年)が主体的に学習するプロセスについては、明らかにされていない。

本実践記録の構成は以下の通りである。まず、2020年度における卒論指導の概要を説明する(2)。つぎに、池谷さんと宮澤さんの卒論作成とその指導の過程を紹介する(3)、そして、まとめと今後の課題は最後に与えられる(4)。なお、倫理的配慮として、学生の氏名は仮名表記にしている。また、学生2名の文章は全て原文ママである。

2. 2020年度における卒論指導の概要

2020年度の卒業論文指導は以下の要領で行われた。前期は、田中が担当する演習科目「現代教養演習Ⅱ」の一部で、卒論指導の時間を設定した。筆者は授業補助として授業に同席した。筆者が行った卒業論文指導は4回(2020年7月6日、7月27日、8月3日、8

月31日)である。

後期は、「現代教養演習Ⅱ」の授業日と筆者が所属していた大学院での授業補助日と重複するため、田中の指導時間とは別に時間を設定して行うことを田中と合意した。スケジュール確定後、サブ・ティーチャーから「基本は田中が指導するので、①田中の指導→②学生による作業→③筆者の指導→④学生による作業→①田中の指導……」のサイクルで行う旨の提案がなされ、筆者も了承した。そのため、筆者が行った卒業論文指導は4回(11月16日、11月30日、12月14日、2021年2月10日)であった。なお、田中や筆者が不在の間は、学生が作業を行うことになったが、適宜、サブ・ティーチャーが助言をしていた。

3. 結果——池谷さんと宮澤さんの卒業論文に取り組む様子

(1) 2020年7月6日

田中が、池谷さんと宮澤さんに対して、卒業論文のテーマ、テーマとして取り上げた理由、卒論指導への要望、3点について尋ねた。

池谷さんは、2015年から2018年までテレビ東京系列で放送されたTVアニメ「ここたまシリーズ」を卒業論文のテーマに設定し、その理由を「ここ数年に僕がみたアニメの中でとくにきにいった作品で多くの人にほしいとおもったアニメのシリーズだからです」と書いていた。また、卒論研究論文指導への要望として、「こども向けのアニメ作品であるため、卒業研究にひつような資料がのっている本がうられていな

いのですが、それでもこのここたまというアニメを研究のテーマにしたいか、かえましたが、本の資料の本のかわりに、ネットのただしじょうほうとアニメのどうがからえたじょうほうをしりょうとして研究したいです」と話した。宮澤さんは、「私が刀剣女子になった理由」をテーマに設定した。取り上げた理由を、「私が刀剣女子になるきっかけとなったのは刀剣乱舞というゲームです。ゲームの中でくる刀の名前やその名前をつけた人や作った人のことを知っておもしろかったのではまりました。そのことについてかきたいです」と書いた。また、卒論研究への要望として、「こまったときにそうだんにのってほしい」と伝えた。

池谷さん・宮澤さんのどちらも、自分自身の興味や関心を起点にテーマを設定している。池谷さんの要望から、卒業論文では本の資料を使用するという理解があることを把握した。また、宮澤さんの困ったときに相談に応じてほしいという言葉、いわゆる申請主義(困っているときは宮澤さん自身から質問をするから、そのときに教員は対応してほしい)と解釈した。

(2) 2020年7月27日

7月6日で取り上げたいテーマについて、どこまで調べたのかを報告することにした。池谷さんは、「僕が研究で選んだのはここたまのアニメシリーズです。選んだ理由は僕がここ近年に自分の見たアニメの中でも、良く考えられて作られたアニメであることです。物から生まれた命のある神様というキャラクターの位置づけで、モノや道具を大事にする心だけではなく、それらに込められた願いや夢や思いやりを知る事ができたアニメだからです。…中略… ちなみにアニメ以外のメディアとしては株式会社バンダイが発売する女兒向けハウスドール玩具が主軸であり、主人公関係のここたまをはじめ、登場回数が多いここたまや専用のハウスは物語終盤に登場したここたまを除いてほぼ全て商品化しているなど気合いの入った商品展開をしていました」と報告した。宮澤さんは、「ゲームの中にキャラクターとなって登場する刀を作った人や名前を付けた人の事を知ったりすることが面白かったのと自分が刀に名前を付けるとしたらどんな名前にしようか考えることが楽しくてもっと知りたいと思うようになりました。刀剣乱舞の特集が組まれた雑誌を読んでいたなら京都で刀の特別展示をしていることがわかり行きたいと思母に連絡を取り一緒に行きました。私は実際に刀を見るのはその日が初めてですごく感動しまし

た。それまで『刀』に興味をもっていませんでしたが知れば知るほどその魅力に取りつかれるように魅かれていきました。ちなみに、私が今、最も見たい『刀』があります。それは新選組副長土方歳三の愛刀『和泉守兼定』です」と報告した。

池谷さんも宮澤さんも、卒論のテーマに関する情報収集というよりも、そのテーマに関心を持った経緯を述べていた。もしかすると、池谷さんも宮澤さんも、何をしたらよいかかわからないのではないかと思います。池谷さんと宮澤さんの関心に受容・共感しつつ、いかに論文として昇華できるのか、そのために何をしたらよいかを明確化するために、授業後、田中に相談して、筆者が池谷さんと宮澤さんに卒業論文の参考程度としてアドバイスシートを作成することにした。

(3) 2020年8月3日

筆者から、卒業論文を作成するために、池谷さんには、①「ここたまシリーズ」の基本情報やどういう層が視聴しているのか(幼年誌に掲載されているのか、アニメ雑誌に掲載されているのか)をまとめることや、②池谷さんが「物や道具を大事にする心だけではなく、それらに込められた願いや夢や思いやりを知る事ができたアニメ」という見方を尊重して、そう思わせた場面を説明することを中心に卒業論文を構成することをアドバイスした。宮澤さんには、①『刀剣女子になった理由』では、卒業論文に仕上げていくのが難しいため、刀剣女子になった宮澤さんが興味を持つようになった『刀』それ自体(特に、宮澤さんが見たいという『和泉守兼定』)を中心に上げてみることで、②土方歳三の刀「和泉守兼定」に関心があるので、和泉守兼定と土方歳三について調べることをアドバイスした。

アドバイスシートを作成する際、心がけたのは、知的障害のある青年だからという理由で、過度に「遠慮」することや(分かりやすい言葉で説明する等の「配慮」は必要)、「書きたいように書けばいい」といった放任とも受け取れる態度は避けたということである。確かに、学生のやる気を削がせる指導になるのは避けるべきであるが、一方で、指導しなすぎること、学生が何をしたらよいか分からない状態を放置(指導放棄状態)することにつながると考えたからである。

(4) 2020年8月31日

この日はアドバイスをせずに、8月3日に筆者が配

布したアドバイスシートを受けて、池谷さんはここたまの情報、宮澤さんはA5のルーズリーフに土方歳三の略歴をまとめて報告した。適切な指示をしたことで、何を情報収集すればよいのかを学生たちが理解して、まとめることができた。

(5) 2020年11月16日

後期は指導教員である田中の指導を受け学生自身で作業した上で、筆者の指導を受けるというスタイルを採ったため、基本的には田中から指導されたことをブラッシュアップする場として卒業論文指導が行われた。

池谷さんは、ここたまシリーズの作中に、「願い」・「夢」・「たいせつなもの」を訴える場面を取り上げることにして、このうちに「願い」と「夢」については書き上げていて、作成がはかどっている様子であった。そのため、①引用していたピクシブ百科事典のURLを掲載すること、②池谷さんから「たいせつなもの以外にも、思いやり（の場面）についても書きたい」というリクエストがあったため、次回の論文指導時まででできたところまででもいいから文章を作ってみることを2点を伝えた。また、宮澤さんには、①筆者が作成したアドバイスシートで書かれていたことをルーズリーフでまとめていたので、まとめてもらった文章を一読し、「和泉守兼定」だけよりも、当時の一般的な刀と比較できると、より特徴が分かりやすくなること、②ルーズリーフよりもWordに書き写したほうがよいことの2点を伝えた。

池谷さんは、卒論で取り上げる内容と構成まで明確化できるようになっていた。そのため、内容を具体化することと、3月の卒論発表会で動画を流したいといった、卒論を書いた後の話もできるくらいに余裕を感じさせていた。一方、宮澤さんは、アドバイスシートの内容は理解してまとめているが、構成まではまだ着手していない段階であった。

(6) 2020年11月30日

前回の指導を経て、どのように学生が作業してきたのかを振り返る時間とした。

池谷さんには、「ここたまシリーズ」の基本的な説明をまとめた文章A4用紙1枚を読み合わせして、誤字脱字を確認し、次回の研究指導時まで、各話に出てくるキャストとここたま（キャラクター）のリストをできる範囲で作ってもらえると、池谷さんが取り上げようとする「願い」「夢」「たいせつなもの」「思いやり」がどの話で出てくるのか見やすくなると伝え

た。宮澤さんには、「和泉守兼定が、会津から転戦を繰り返して、函館戦争で戦死した土方の手から、日野の家族の下に戻った経緯には様々な説がある」と書いてあり、その説にはどういう説があるのか、また、どのような根拠で主張されているのかを調べることをアドバイスした。

池谷さんは、卒論で書く内容を取捨選択する段階に到達していたが、宮澤さんはまだ情報収集の段階にとどまっていた。ちょうど、書く内容に宮澤さんが困っていたタイミングで、和泉守兼定が日野の家族に戻った経緯に様々な説があると書いており、筆者はこれに注目した。和泉守兼定のみならず、例えば、明智光秀が本能寺の変を起こした理由や耶馬大国の所在地などは諸説あり、論争が行われている。日野の家族に戻った経緯についても、論争してそれぞれの説が正当性を主張しているはずだから、何を根拠にそれぞれの説が正当性を主張しているのかを明らかにすれば、十分卒業論文として書ける内容になるのではないかと筆者は考えた。

(7) 2020年12月14日

池谷さんとのやり取りで、「思いやり」は「たいせつなもの」に入れてもいい内容だったので、「願い」「夢」「思いやり」の3つを基本構成にすることにし、あらずじと池谷さんのコメントを載せる形をとることを確認した。宮澤さんには、指導時間前にサブ・ティーチャーから、宮澤さんが調べようとした、和泉守兼定が日野の家族のもとに戻った経緯は調べたが出てこなかったのことを伝えられたため、「寺谷個人としては面白い論点だけど、出てこないのであれば、それは深く取り上げるのは難しそうだね」と伝えた。その上で、宮澤さんに最優先課題として、宮澤さんが作成しているルーズリーフに書いてある個々のメモをWordに打ちこむことを助言した。ルーズリーフに書いてあることをWordに打ちこみおえたら、「刀全般の話」（本論の前半）と「和泉守兼定の話」（本論の後半）に分けることを伝え、また、論文の初めに書くことになるであろう、「宮澤さんが刀剣乱舞に関心を持った経緯」をメモに書いておくことをアドバイスした。

このころから、筆者の関心は、池谷さんよりも、卒論作成の進捗がゆっくりな宮澤さんに向けられていた。しかしながら、90分の時間で研究生の宮子さんも入れた3名を指導することになっていたため、宮澤さんにアドバイスできる時間も限られており、さらに

は、困ったときに相談に応じてほしいというものの、困っていることが明確に意思表示していないために、どこまでこちらから働きかけて個別に指導すればよいか困惑した。また、ルーズリーフを Word に打ち込むことも、2回指導しているが、あまりに言いすぎると教員主導が行き過ぎると思い、宮澤さんのタイミングに任せることにした。

(8) 2021年2月10日

卒業研究論文の提出が近くなり、池谷さんは、草稿を用意して、一緒に誤字脱字や表現の確認を行う段階となった。一方、宮澤さんは、ルーズリーフに書いている文章を打ち込んだデータは持ってきたが、まだ草稿すら完成していなかった。指導中に、キーボードにタイプする音が大きくなり、イライラしている様子であった。イライラしていた原因は定かではないが、宮澤さん以外の2名は卒業研究や研究生論文を完成させて、あとは誤字脱字等を最終チェックする段階であったことから、自分だけまだ完成もしていないという焦りがあり、さらには、他の2名も最終チェックを希望している様子を見て、困っているから相談の時間を多く割いてほしいと言えなかったのではないかと推察される。さらには、筆者がこの卒業論文指導の時間のみ来校することになっており、連絡先も知らなかったことで個別にやり取りもできない状況であり、一般の大学にみられるような授業時間外で個別に指導を行う機会がなかったことも、相談に応じることができなかった原因だと考えられる。

(9) 2021年3月13日

2名の書いた卒業論文は、3月に行われた卒業式前の卒業論文発表会で報告された。池谷さんは、「ここたま」アニメシリーズ アニメここたまと込められたメッセージ」、宮澤さんは、「刀の研究—刀剣女子の立場から—」として提出した。

池谷さんは、卒業論文の作成を通じて、以下のよう

に述べている。

僕がこの大学に入学してから4年間は、先生から科学や地理など様々な話を聞いたり、名古屋の運河やいわきの名所や復興を頑張っているなみえ町など色々な場所にも出かけて、いい体験ができました。他にも、名古屋のアパート一人暮らしも自分で考えながら料理を作ったり名古屋の色んな場所に出かけたりと、とても充実していた大学生活を楽しめました。

しかし一方で過去からずっと引きずっている不

安やネガティブな気持ちを直す方法が見つからないまま、親や先生や生徒にも打ち明けられず、その辺だけがしんどくていつも一人で落ち込んでいました。そんな僕は辛いことが頭から離れないときはガンブラを作ったり、地下鉄やバスでお出かけをするなど趣味を楽しむ事が何よりの癒やしでした。特に毎週木曜に放送していたここたまのアニメは入学した年から三年生の後半まで毎週見ていたので、僕にとっては名古屋の生活の思い出の一つでもあります。4年目は新型コロナウイルスでお出かけやガンブラを買いに行くことが大幅に少なくなり、大変困りましたが、今までとは逆に親や先生に今まで人に話せなかった気持ちを少しずつ話せるようになり、自分の健康にも気をつけるようになり、自分の気持ちを前向きに切り替える方法も見つけることができました。

そんな気持ちでここたまのアニメを見返すと、ここたまのアニメのメッセージの意味をより深く知ることができました。そのためたとえ参考資料が無くても、僕が好きなキャラクターで大学の生活にも少なからず関わっていた物なので、卒業論文に選びました。僕は大学を卒業した後、これからのことは実家の大阪に戻ってじっくり考えます。でもこの名古屋の4年間は勉強も一人暮らしも、僕のこれからの人生に絶対に貢献すると思っています。

また、宮澤さんは、以下のように述べている。

長さや大きさだけでなく戦いなど時代によってことなるので普及していた刀に違いがあることや打ち直されたりしたことがわかりました。例えば薙刀は平安時代後期以降に誕生し、鎌倉時代までは盛んに用いられたがその後、打刀や脇差になった物が多いことを知りました。

私は土方歳三のことを落ち着いた人だと思っていたら調べていると荒っぽい性格だったのに意外性を感じました。調べていくうちに頭を抱えて悩みながらでしたが刀について深く調べることができて良かったと思いました。

4. まとめと今後の課題

大学における知的障害等のある青年の学習を実質化する際の検討課題は、概念的スキルの困難性を有する知的障害等の青年に対する講義・演習・実習といった教育場面における修学支援の在り方であり、本実践記

録は、この在り方に示唆を与えることを目的としていた。以下、取り組みの過程から感じたことをまとめることにする。

取り組みの過程で、まず、青年たちが大学で学ぶ1つの有効な学習形態として、まず、本人たちが関心を持つテーマを設定し、テーマについてリサーチを行い、その中で知識を獲得・活用する探究型の学習方法は適切であると考えた。

つぎに、知的障害等のある青年に対する学習場面では、学習方略の指導や自己調整学習の指導を一層丁寧に行うべきである。宮澤さんが卒業論文作成で苦労したのは、卒業論文という課題を解決するための見立てや過程、自分に合った学習方法（学習方略）を自分自身で客観視（メタ認知）することが難しかったというところにあるのではないだろうか。筆者は途中でアドバイスを作成したのは、論文の章構成が全く描けていないのに本論を書き進めることは一層難しいと考えたからである。論文の章構成を教授者側が手取り足取り教えるまでとはいかなくとも、論の道筋（このようにして論を展開することは可能ではないか）を青年と対話しながら提示することは必要であると考えた。

最後に、指導した経験から、同じ知的障害等のある青年といえども、池谷さんと宮澤さんではかなり進捗が異なっており、やはり授業時間外での個別指導は必要である（なお、個別指導の必要性は、「コミュニケーション実践演習」を担当経験のある大幸（2016）も同様の指摘をしている）。筆者は、卒業論文指導で3名の学生を担当したが、「学習者同士の協同的な相互作用による達成成果を高め合うことを目的」（杉本2019：88）とする協同学習は、学生同士で関心のあるテーマがあまりにも異なる場合には互いの研究テーマに関心が持ちにくいから、あまり有効ではないように感じた。それよりは卒業論文指導の場面では、個別指導が有効であると感じた。卒業論文指導の場面で池谷さんを指導している際は、宮澤さんと場面緘黙のある研究生の宮子さんにアプローチすることができなかったからである。

以上で示したのは、筆者が青年たちとのやり取りの中で見出した経験を根拠としていることから、今後、教育心理学や教育方法学の観点から、発達障害や知的障害のある青年に対する講義・演習・実習といった教育場面における修学支援の在り方を、経験則ではなく一般化できるよう、研究が蓄積されることを期待したい。

付記

本論文は、2021年9月19日から9月20日まで開催された日本特殊教育学会第59回大会（オンライン開催）における自主シンポジウム「大学における知的障害青年の学びと課題」（企画者：田中良三）での話題提供を基に、加筆・修正を加えたものである。

注

* 愛知県立大学教育福祉学部客員共同研究員、愛知文教大学・大同大学・名古屋経済大学・名古屋医健スポーツ専門学校・近畿大学九州短期大学通信教育部非常勤講師、NPO法人見晴台学園大学客員共同研究員

- 1) 2021年1月に実施された「新型コロナウイルスの影響を受けた学生への支援状況等に関する調査」によれば、2020年度に中途退学した学生の理由として、学力不振が7.0%、学生生活不適応・就学意欲低下が18.3%であることから、知的障害のある青年が入学しても、学力不振や学生生活不適応・就学意欲低下に陥る可能性は否定できないだろう。（https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_kouhou01-000007001-1.pdf 最終アクセス日：2022年6月19日）
- 2) 本論文では、NPO法人・学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会が運営母体である「(法定外)見晴台学園大学」の略称として用いる。

参考文献

- あいち県民教育研究所編（2020）『現代の子育て・教育』ほっとブックス新栄。
- 大幸昌子（2016）「自分の思いを言語化する」田中良三・大竹みちよ・平子輝美『障がい青年の大学を拓く インクルーシブな学びの創造』クリエイツかもがわ、43頁。
- 大竹みちよ（2016）「卒業」田中良三・大竹みちよ・平子輝美『障がい青年の大学を拓く インクルーシブな学びの創造』クリエイツかもがわ、177-197頁。
- 古山萌衣（2019）「青年期における特別ニーズ教育に関する一考察—NPO法人見晴台学園大学における取り組みを中心に—」『中部教育学会紀要』第19号、32頁。
- 杉本明子（2019）「学習理論と教授・学習指導法」杉本明子・西本絹子・布施光代編『理論と実践をつなぐ教育心理学』みらい、72-94頁。
- 高橋智・池田敦子・田部絢子（2020）「当事者のニーズから考える知的障害教育の機能・役割」『障害者問題研究』第48巻第1号、全国障害者問題研究会、34-39頁。
- 田中良三（2017）「発達・知的障がい学生の卒業論文の取り組み—法定外・見晴台学園大学における学びと支援—」『名古屋芸術大学教職センター』第5号、81-95頁。
- 寺谷直輝（2021a）「発達・知的障害者の大学での学びの可

- 能性—特別支援学校高等部の教育課程編成（カリキュラム・マネジメント）と教育方法への示唆—」『発達・知的障害者の大学教育研究』第4号、51-61頁。
- 寺谷直輝（2021b）「場面緘黙のある学生における論文作成を通じた学び—「総合的な探究の時間」における学習指導を視野に入れて—」あいち県民教育研究所『あいちの子育てと教育と文化』第29号、62-70頁。
- 向井啓二（2007）「ダウン症などの知的障害の人への大学における教育」『障害者問題研究』第35巻第1号、46-51頁。
- 文部科学省（2020）『特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編（上）（高等部）』ジエース教育新社。